



花名所懐中曆

3015
3



へ13
3015
3

特

懐中^{くわい}の^{ちゆう}女^に三編^{さん}の^{びん}序^{しゆ}

三編序

神^{かみ}氣^き一^{いつ}乾^{けん}雨^うの^の露^ろを^をら^らん

萬^{まん}物^{ぶつ}の^の有^あり^まは^はし^しる^る推^{おし}す^すん^んと^とす^す

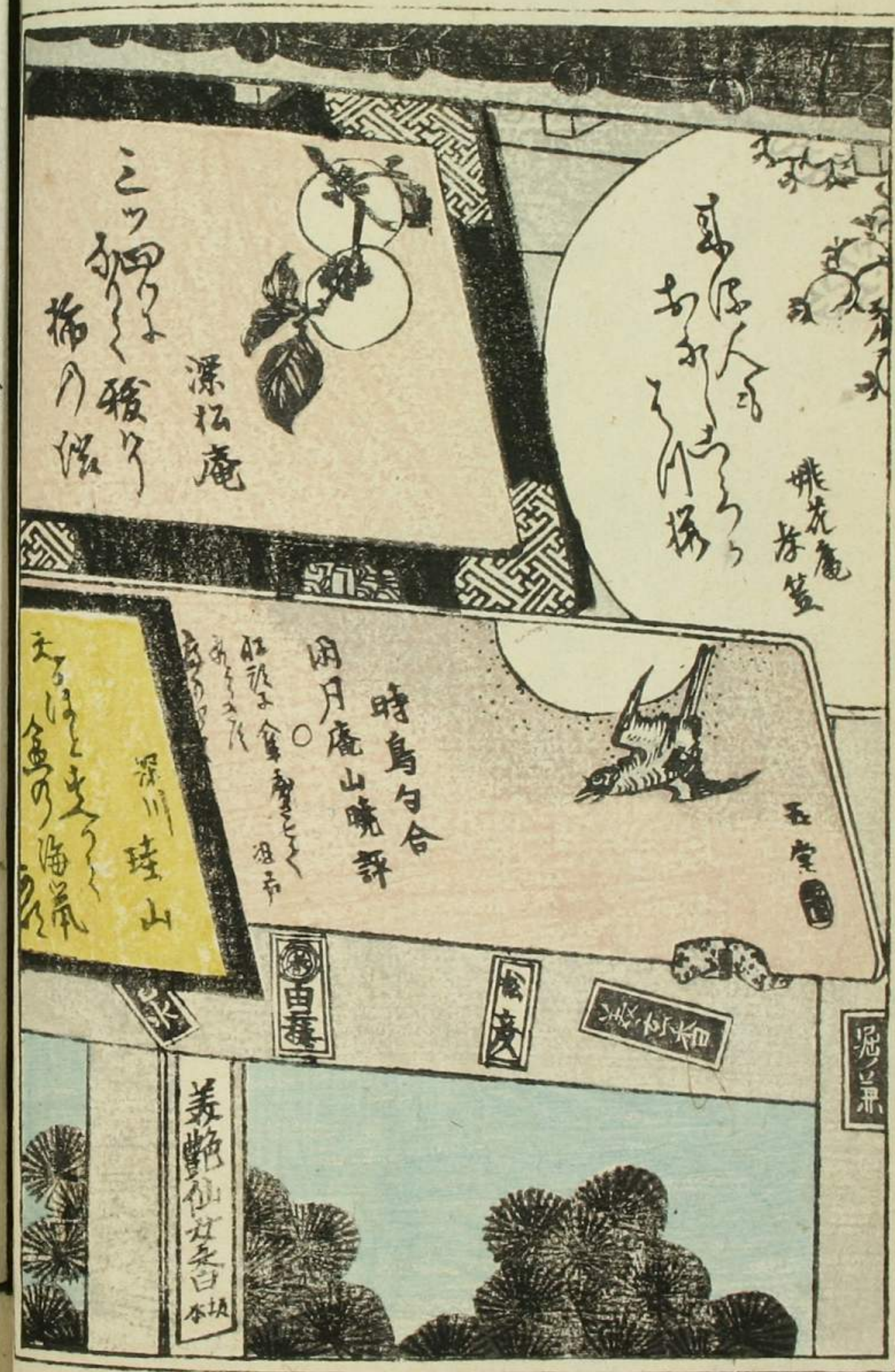
〜の^のあ^あら^らは^はし^しる^るけ^けれ^れが^が

申^{まう}ふ^ふの^のあ^あら^らは^はし^しる^るけ^けれ^れが^が

〜の^のあ^あら^らは^はし^しる^るけ^けれ^れが^が

小説者流の古事未曆を引
きよみ南ゆゑの稽案も綴るあけさせど
巻毎に新奇州案河をさし申し
西の園あり自笑其跡が再施
きくもよもやうの
ひかきかち。あつた
貝の腹に。あつた
てあつた。

娘連中けり者屋よそむきまゝイヨ梅
おと美の粹よあま見が相ふらぬ花
の多々る所おと美の天一天上中
本の三教寶珠とあつた。
天保九戊 小川街の縫人
鈴子屋杜蝶誌
甘き心持



茂平花名所懐中曆三編上之巻

江戸 狂訓亭主人著

第十三回

窓鏡の艶羅うらみ四方に満綾羅錦繡を物好せし
 風流女ハハも愛び一夜笑む六宮の三子女さくらも艶を
 身ふさぐ賞美はべき美女ハハ入所ハ驚かすさだハ三子
 余町一丁に美女長屋と浮名をる美人の重役極ありて平
 ら一棟の序側立黒塚を新並にうけ渡して増次の

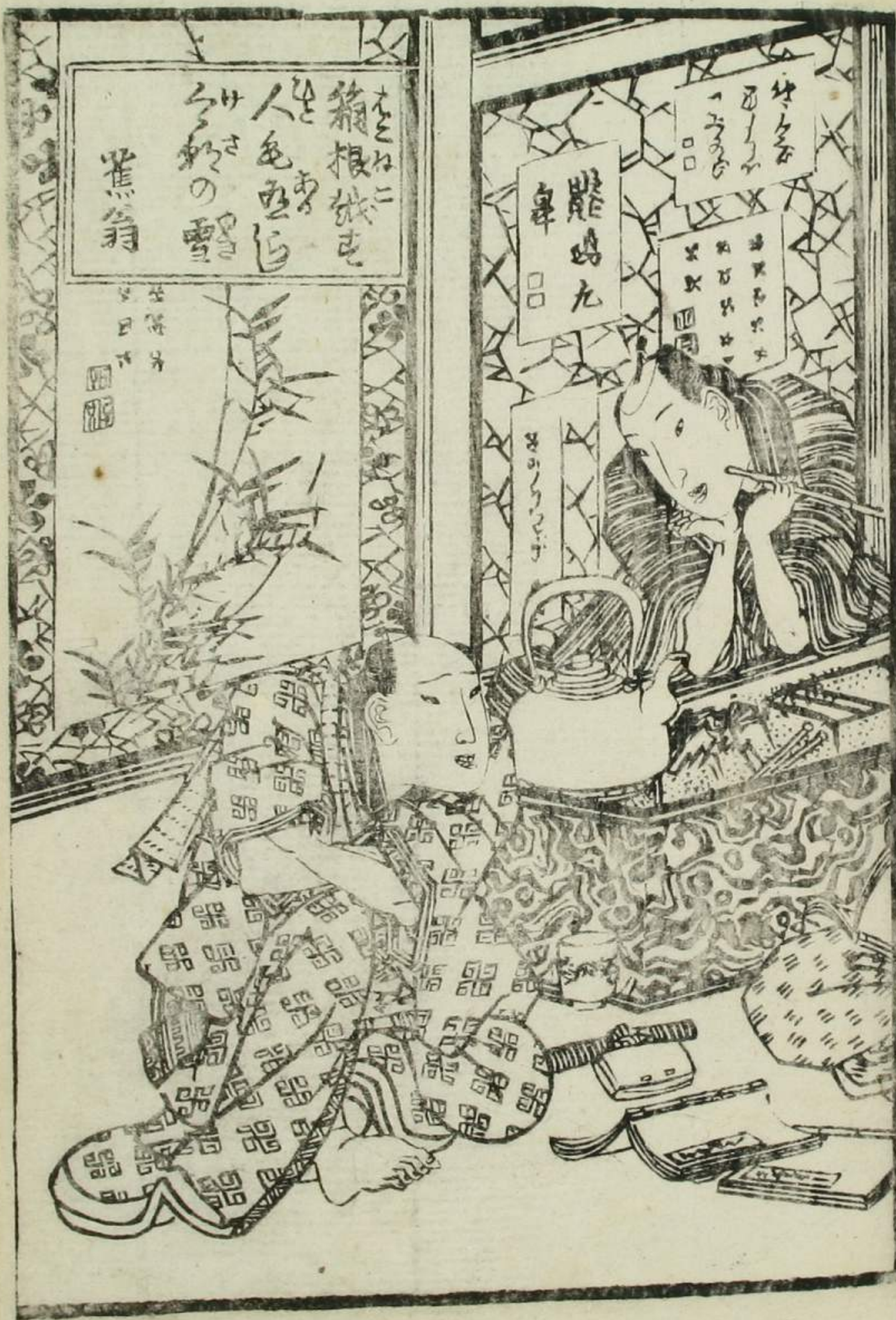
入は勅するのどきくしありを後ひのく蓋とる一紙毎
小橋子戸まゝ六如痛めく目の腰膝子中洞壺と老る
葉落の門並に空しく一換よそひ陰者の魚をと出
誓妻の賜をつけくまひをわうそふ冥妻をうそめく
たぐう一と裏家の惣昌誓古木のきつがえんとまに
お兼子まんの相後しく大衆さまの遊物うもるに暗次の
公祀まらんそのもは裏の三間月わりのりも當るがらの独
身うぬく家内に居る筋八三四人の女達が大式の柱ひごころ
友達もあつちあつちの中は公易くおまが真まとのつまが柱を
ゆいこと差別うねうり今日あゆましく宅に居る夕アより
雲に降ると心からまじりて四人の息子連中己刻時分に目を
覚しきかうく火を焚ける者あまは連のよびき従めて
目下とのあふあふせ一サカく病人が起るうくマア早く
起て見せりや一太雲とあらせ一イヤそのあつらうてこれ
らやア思ひは痛いとまじりて一おらぐぬぬり一まのゆきり
プアム宮様をけまきぐりうりてせし聴きわ入のぬきあア

見たりく、ハラヤ、淨りりが見たりるものなり、ハ、
 ひが火をひらりらんり言ひとも起まじいものぬち、
 ありら、氣をよく、居るものなり、ハ、
 やがら、モリ、ハ、
 勝るもの、ハ、
 わりり、
 せりぬ、
 の、

花の盛に月の隈をみるもの、
 東に流るる公の、
 往來のひと、
 山形、

義仲、
 逆撫を、
 妓婦の、
 勢ひも、

中を



さういふ事をするにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると
いふが如く版を造るにせらるる方々も居ると

方八百五十と云ふ軍さびうら
を新づく 己の時どりの新地の海へ
あの晩ゆき 櫻川の由良の宅へ
家をたき起し 家のむすさんが
徳一を左様く 己三さんが
のXの晩八歳人ど 櫻川の
七人ごうけ 己三さんが
まご版を造るにせらるる方々も居ると

あまうせのきまけへるやど^{おまのいん} ね雅者^ねごう^{ごう} さらさらのぬ
鏡^{こころ}らう^{こころ}と^{こころ}思^{こころ}る^{こころ}と^{こころ}何^{こころ}でも^{こころ}ね^{こころ}と^{こころ}あ^{こころ}け^{こころ}方^{こころ}の^{こころ}公^{こころ}思^{こころ}ふ^{こころ}極^{こころ}ま^{こころ}と^{こころ}に
小^こ思^こえ^こら^こう^この^この^こご^こア^こな^こと^こあ^こア^こ左^こ極^こと^この^こ三^こ吉^こ入^こ実^こひ^こま
の^こう^こノ^こ動^こへ^こし^こ内^こ鏡^こと^こあ^こご^この^こヲ^こ已^こハ^こナ^こニ^こ 動^こへ^こし^こら^こん^こ け^こ方^こが^こは^こ極^こま
と^こま^こり^こり^こと^こ居^こる^この^こ公^こ思^こふ^この^こ子^この^ここ^こま^こを^こ使^こヨ^こま^こと^こに^こま^こす^こ
女^{おんな}好^{この}ど^{この}ヨ^{この}ク^{この} 已^こへ^こて^こ 女^{おんな}も^{この}ま^{この}ア^{この}と^{この}ま^{この}う^{この}と^{この}者^{もの}ご^{この}ど^{この}泥^{どろ}も^{この}は^{この}日^ひ
や^{この}今^{この}日^{この}香^{この}た^{この}ら^{この}め^{この}や^{この}ア^{この}あ^{この}入^{この}し^{この}ち^{この}う^{この}と^{この}氣^{この}を^{この}つ^{この}け^{この}ね^{この}な^{この}ハ^{この}か
右^{みぎ}上^{うへ}已^こハ^こし^こを^こも^こね^こ入^こぬ^こん^こご^こア^こ三^{この}吉^{この}が^{この}と^{この}ま^{この}を^{この}開^この^こめ^こな^こり^こと^こ一^{この}

おの^{おの}居^{この}る^{この}の^{この}ま^{この}り^{この}珠^{この}に^{この}發^{この}明^{この}ら^{この}し^{この}の^{この}女^{この}ご^{この}う^{この}ら^{この}實^{この}ひ^{この}ま^{この}の^{この}
ま^{この}ら^{この}よ^{この}し^{この}と^{この}思^{この}ふ^{この}と^{この}ま^{この}り^{この}の^{この}公^{この}思^{この}ふ^{この}ま^{この}と^{この}極^{この}ま^{この}者^{もの}ご^{この}も^{この}あ^{この}り^{この}
あ^{この}入^{この}う^{この}と^{この}思^{この}ふ^{この}と^{この}開^{この}く^{この}ま^{この}の^{この}の^{この}ご^{この}ア^{この}ま^{この}が^{この}と^{この}ま^{この}う^{この}と^{この}鏡^{この}ら^{この}
て^{この}思^{この}ふ^{この}ま^{この}り^{この}ま^{この}り^{この}の^{この}方^{この}に^{この}眼^{この}の^{この}け^{この}と^{この}ま^{この}ん^{この}む^{この}ら^{この}も^{この}あ^{この}り^{この}け^{この}
ま^{この}と^{この}を^{この}極^{この}ふ^{この}け^{この}方^{この}が^{この}ま^{この}う^{この}と^{この}ま^{この}く^{この}男^{この}ら^{この}し^{この}も^{この}ね^{この}と^{この}ま^{この}り^{この}
連^{この}た^{この}ま^{この}が^{この}は^{この}ま^{この}あ^{この}ま^{この}の^{この}氣^{この}味^{この}ら^{この}ら^{この}は^{この}方^{この}が^{この}ま^{この}り^{この}と^{この}
居^{この}る^{この}の^{この}ご^{この}何^{この}でも^{この}實^{この}ひ^{この}ま^{この}り^{この}の^{この}方^{この}に^{この}ま^{この}り^{この}と^{この}あ^{この}る^{この}極^{この}ふ^{この}お^{この}ま^{この}が^{この}
ま^{この}り^{この}を^{この}し^{この}て^{この}居^{この}る^{この}の^{この}ご^{この}何^{この}でも^{この}ね^{この}入^{この}極^{この}ふ^{この}思^{この}ふ^{この}と^{この}居^{この}る^{この}を^{この}し^{この}て

お出まはるのまじりしハヤ左様うハテあまのま ちり日ハイヤ
 つゆらねるまじりし見下りひつお原の顔を見まはる今
 年十戈おやし一風のまんとして身のからうらあるま
 ことかま情まじりし風情さくら小男子の心を奪ふ所
 勅書あふりつづかおとせんおの嵐あわづらして牛海に花
 の雲の目やぞつと吹来る恋風おの癖をど増るが

茂平花名所懐中曆三編上之巻了

茂平花名所懐中曆三編中之巻

江戸 狂訓亭主人著

第十五回

むう一鎌金の辰巳小島つとまの料理茶をるるが仕立破れ
 の女子どりしまも英一々阿那るるまら地割小島つとま
 合せ早くと婦多川とゆき別境の梨屋八柳屋小島つとま
 里の南の端不祝知と笑へ一里あり氏置八国けくよりまの
 世界小雑文自自然の人を軽きゆく智急賢一依く軽知と

あゝ冥小蓬萊の津屋とやしらんさ息女も乙姫小まけぬ
名代の乙吉あり若吉小六二本蔭りんとらむも流りその
申小徳就が道外ハお客小後をくさせるのちりしありにふ
そのまゝとよまき 影子小知一年坊の唄女も是ぬ土地でも給を
よく合鏡の上の世事もまらめし電相ののそもくそ
素生を身ねぬ破玉川小引込ありしを浪との小郷郷との
ゆゑおのひもよらぬ哉平小安り義理ある人のお三が子もあ
つゝ今もそのまゝ今も後をわたり 隠者の父小別目をつけ

親と哉平の見縁のよめふあふ来りし身のゆき水の流の
御八瀬とらるる浮世もあゝおのれありや哉平の住居風情
あゝ秘と酒客入のひのきふらるるを友達の寿合新とありより
いと縁の活業も不自由もあゝとせしを喜ぶ表らる
「哉平さん宛小お出り」やお浪り細文の結ぶらるるわ
トしおをまがらう時子をわらへりありしひ「ナぞそんな
りやうしんをまがらうナニのうらみかおののうらみ
のをこららるるおまを合せしつてまがらうらるるわ



尾州百 春秋
仲秋
見
て
お
ま
さ
り
の
秋
を
見
て
お
ま
さ
り
の
秋
を
見
て
お
ま
さ
り
の
秋
を



小間物仕入帳
釧甲物之帳
金銀出入帳

多しりりかあ人が今更の仇な活業を待たずして
仕へ居るのぶる時と斬が実をまき 後日の事とけし
どもあきつめの為小唄を垂う 今更の世話をし
くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

くまののぶ入ト眼をまきくまけらまきくまハあん
ま日けともあきつめの世かせ死 御ふつとく 只おぼめが
合うう毛やらんくやあまへくまあぬ憂をかつるも
樂しきことこそまきくま 甲斐もまき 隔て 後ハ他外の人の
御めの花ぞともありき 居るやあまを人の為小唄女となり

やませんそとぞりやアアア毒を流付て

いそろーやきほろろよッ

あはれ〜ん〜ん〜ん

〜んあ〜ん〜ん

〜ん

あ〜ア

酒でも一口

呑みナサア



トらうくを〜ん〜ん〜んを〜ん〜ん

ませんヨト 粒を成平ふま〜ん〜ん

よりの 秘儀を〜ん〜ん〜ん

抱が〜ん〜ん〜ん

涙の母を〜ん〜ん〜ん

元来〜ん〜ん〜ん

英小神雪より 白き粉元のそのう〜ん〜ん

ハ〜ん〜ん〜ん

はく同ト昔芳あつて我身ハ小三と名取小腰をめぐら
けを三ハ独りあつて女の身ゆく民理も立操もまじく見
までの昔芳あつて赤あせり昔芳の上の百倍あつたと遠く
ふびん不仕守もあつてまをうりうりさきほあふまづく
まじく一昔一昔も元ハかこをまきまひ物や思ふと母も
素トさせたる無縁の情疑ひもまてハ元付やうかなひれ
後の雪月もあつてふハまじくトより女が上のまじく
どうのまじく一ハ大が替替がハまじくまじく三昔さんあせ

さう〜おまじくまじくは持病のお癒久一ナニまじりあつて
かゝ客が癒ふく〜おまじく居る〜アト笑ひあつて
女ハ〜癒ふ〜おまじく癒が癒りまじくまじく三昔さんハ
まじく〜癒ふ〜おまじく癒が癒りまじくまじく年中癒が癒
癒が癒ハ癒ふまじく三昔さんのお癒ハ〜おまじく癒が癒
小まじく〜癒ふ〜おまじく癒が癒りまじくまじく笑ひあつて
三昔さん癒ふの癒を〜癒が癒〜癒の癒あつて癒ふ癒を
癒が癒や酒樓と妓院ハ癒癒の癒を〜癒が癒〜癒をさう〜癒

おろし 息をど 吐く

花名所懐中曆三編中之巻終

茂平 花名所懐中曆三編下之巻

江戸 狂訓亭主人著

第十七回

むう 異朝の王憲宗の時小趙漢との小者と樓得連との小者
者二人が其の上もあつて其をわつて御例小
仕へて其公をりて 毎毎小其をうつて君をうぐさめけ
るがりのことあり 趙漢の憲宗の公小漢くうのひ樓得
連より小其をせうして二個とも其を小あつて其を

用前六憲宗より賞銀を其人の例小並く請ふる之
賜ふる事小近來ハ趙漢の之請つゞきて樓得達ハ毎日
一月の請もどる事ありて故に不負つゞけて君の意を
於らるべしとおもひ趙漢不問くを輕と賞銀を一倍小
しく報ふべき事明日ハ我小負ふ事ありとひけき趙漢
漢も怒りて許容をせしその翌日ハ局小むらふ趙漢ハ
詐つて所為と負よりあふおのて樓得達ハ大に
うらみて賞銀の紙包をいさきて家小うける事小賜ふ

賞銀ハ其價三兩ほどつゞきて趙漢ハ其倍六
五をよつて今日の俸小及びいさ敷賞札を役所へ
持出その料を賜うんと致しおの事小あらん
君ハ趙漢をいさきの暇り今日も樓得達が負ふハ必
定ある事賞銀を良字書ふて一万石と記さして紙
包ありあはれ小うらむ事其拂りの役人より願地を請
一万石小補せらるけり其の故小帝も嘆息し一書ハ
人の事不幸ハ他のいさしみも力も及ぶ所も

かゝるくの定数ある事あらんと作せしむしとぞ實小
さもあらんうせ男をえり小男女の仲もそ是れ似たり互
小惚く信實をそ一合つ一生を情人ぬくは是れ義理
もあり双方とも小惚合むしりうらげまぬとあり一代
くも是れ家もあり室あぐたを定めても自由あらぬが
是の路を道を苦勞小舟をもちむが情人の欲とありあ
さても哉平の不思儀もめづり合ふは三が子物をばりめ
種くと心を配る茶は今朝も他所へおぼれ性く我家へ

まゆと何所のるあり、豊吉の哉平の方小来りく火辨
の隙小様ふありと三世相とのふ本をあけく男女合性の所を
續めがう眼をうるまう涙をうるめ哉平のゆりうををててもろ
くくふりのもふむおぼれはる哉平の喜ふくまぶその儀小
女座よりエエウ少お浪をきかどらうしごおせ候らんが居るの
かまエお浪はひをまきつりしごま一向返るるせは打師くおる
一愚智をりのやうぶかおらうア何もお茶おほせるやうなるは仕人
つものぶがめんぞきふさるるるがあるのゝ然居らやアおらう

口舌の源
阿比の源
色濃と云
山より
為永津賀女



秘(せ)ぜモウク、今(いま)ぢやア秘(せ)〜〜英(えい)婦(ふ)人(にん)づゝあの中(なか)小(こ)住(ぢ)
居(ゐ)る他の(か)の女(め)ア女(め)どもあやア身(み)入(い)り只(ただ)以(も)昔(こ)昔(こ)小(こ)あつゝのハ
お茶(ちや)の子(こ)むらり〜少(せう)〜〜借(か)り金(かね)が有(あ)りやア今(いま)連(れん)小(こ)引(ひ)
發(は)せるとりあやうもあまを〜〜便(べん)〜〜居(ゐ)る中(なか)
あやア好(こう)風(ふう)な男(おとこ)が幾(いく)人(にん)も有(あ)る去(き)地(ち)づ〜〜方(か)一(いち)の子(こ)でま出(で)
ま〜日(ひ)あやアそ〜〜居(ゐ)るま〜〜自(みづか)り〜〜の
時(とき)〜〜三(さん)の好(こう)業(ごう)〜〜の好(こう)〜〜の好(こう)〜〜ぢやア
秘(せ)〜〜あ〜〜ア〜〜ア〜〜ア〜〜ぢやア私(わたし)の身(み)万(ま)一(いち)の子(こ)が

てま〜〜何(なに)の事(こと)がエ〜〜ナニサまづい子(こ)を〜〜あ〜〜ぢやア
秘(せ)古(こ)所(じよ)の時(とき)分(ぶん)〜〜知(し)〜〜居(ゐ)るま〜〜身(み)の付(つ)秘(せ)中(ちゆう)ハ〜〜ま
及(およ)ぶ〜〜子(こ)〜〜身(み)も〜〜あ〜〜け〜〜ぢやア〜〜あ〜〜の地(ぢ)
ふ〜〜〜と〜〜日(ひ)ま〜〜小(こ)垢(あ)ねが〜〜秘(せ)古(こ)所(じよ)の節(ふし)〜〜り
玉(たま)川(がわ)の節(ふし)が〜〜り〜〜玉(たま)川(がわ)の節(ふし)〜〜り〜〜十(じゆ)段(だん)も〜〜ま〜〜い
あ〜〜い〜〜茶(ちや)の子(こ)〜〜〜〜〜他人(たにん)が〜〜秘(せ)〜〜と〜〜い〜〜ぢやア
あ〜〜秘(せ)古(こ)所(じよ)が〜〜あ〜〜身(み)入(い)り〜〜苦(く)勞(らう)〜〜アナ〜〜ヲ〜〜ヤ〜〜〜マ〜〜他(た)〜〜ま〜〜小(こ)
あ〜〜い〜〜ま〜〜〜を〜〜ま〜〜るのふ〜〜せん〜〜茶(ちや)を〜〜い〜〜〜ま〜〜ぢやア

